

イスラームにおける聖と日常性

小田 淑子

関西大学

序論

イスラームにおいて、聖なるものがアッラーとその言葉であるコーラン、およびそこから導出されたシャリーアであることは自明であるにもかかわらず、聖と俗の関係はわかりにくい。聖と俗は宗教の普遍的な構成要素であり、宗教学の基本概念でもあるが、それがイスラームには適用しにくいのである。このことは従来から指摘されており、その理由は、イスラームには教会と国家、宗教と世俗社会との区別がなく、一般的には政教一致のように見えることによる。イスラームに聖なるものが顕著に存在するにもかかわらず、聖と俗の関係を捉えにくいことは、コーランおよびシャリーアという聖なるものの性格によると考えられるので、一方ではイスラームにおける聖なるものの性格を検討する必要がある。

他方では、この問題は聖と俗という基本概念が決して自明ではないことにも由来する。従来の聖俗理論は聖なるものに焦点を当て、その顕現と聖なるものに特有の現象や形態を研究してきた。聖なる空間や時間は儀礼、聖地、寺院や祭壇に代表され、聖なる現象や形態は神秘体験や神や仏の画像などである。聖なるものの特徴は日常生活から区別されていることにある。逆に言えば、日常生活は単純に俗なる空間時間とみなされ、その宗教的意義や聖なるものとの関係は十分に考察されてこなかった。ところが、本論で詳しく論ずるように、イスラームは徹底して在家者の宗教であり、日常生活にも宗教的規範が及んでいる。仏教は生老病死という意志の関与できない人間の自然、および病や死のように非日常の場面における人間存在を深く考察した宗教であるが、イスラームは健康な日常生活における人間存在を鋭く洞察する宗教なのである。従来の聖俗理論が非日常的な聖なるものを中心に考察し、聖と日常性の関係を考察しなかったがゆえに、イスラームにおける聖俗関係が捉えにくいのである。

俗なる日常性や世俗社会の宗教的意義が改めて問題となったのは、近代以後の世俗社会が反宗教的ないし非宗教的な世界となったことによる。世俗という表現が非宗教的領域という意味をもち始めたとき、近代以前の世俗社会、聖俗関係における俗を近代的な意味での非宗教的世俗と同一視できないなら、それをどう説明するかが求められている。世俗化は社会学や宗教社会学の分野では近代化と並んで主要な主題となり、数えきれない著作や論文が書かれている。そこでは、伝統社会と近代社会の相違が考察され、近代化がウェーバーの言うように単純な脱呪術化ではないことも論じられてきたが、宗教学的な聖俗理論の再検討は充分になされたとは言えない。

本論ではまず、イスラームにおける聖なるものについて論じ、続いて日常性と聖の関係をイスラームの聖俗関係を例に試行錯誤しながら考察する。この考察から従来の聖俗理論の再考を

試みたい。この論考の片隅には、現代の宗教状況をどう捉えればよいかという問題意識もある。グローバル基準の存在が当然のように語られる一方で、イスラーム過激派は暴力を用いて欧米に異義申立てを行い、文明の衝突が懸念されている。いったい現代における宗教は、聖なるものはどこにどのように存続しているのか、本当に人々は宗教を捨て去ったのか、解けない問題が山積みである。イスラームの伝統社会と現代の動向を念頭において、古典的な聖俗理論を考えてみたい。

1 イスラームにおける聖

イスラームにおける聖なる存在は唯一神アッラーであり、この神の自己顕現がムハンマドへの啓示である。啓示はムハンマドを介して二二年間続いたが、その死と共に閉ざされた。啓示の出来事は一度限りであるが、啓示の言葉は聖典に編纂されて固定され、今日までイスラームの源泉であり続けている。メッカはイスラームの聖地であり、世界中のムスリムが日々の礼拝をメッカに向かって行い、一生に一度は巡礼をすべき聖なる場所である。モスクはイスラーム寺院と訳されることもあるが、正確にはマスジドといい、跪拝する場所、礼拝所を意味する。金曜日の昼の礼拝時にはモスクでの集団礼拝が行なわれるが、それ以外の礼拝もモスクで行なうことが望ましいが、自宅や職場、移動中であれば列車やバスを下りて道端で行なうこともある。イスラームなど世界宗教でも、古代宗教と同様に、聖地や儀礼の日時は定められているが、それ以上に個人の信仰が重要であるゆえに、聖なるものとの精神的交流は場所や時間に限定されない。古代宗教でも個人の信仰心がないわけではないが、個人の信仰や救済は世界宗教のように強調されない。古代宗教の神々は地域や民族の神という性格が強く、神々との交流は儀礼や祭祀の遂行においてこそ可能なのであり、儀礼が個人の信仰以上に重視される。

イスラームにおける聖なるものは聖典コーランである。コーランはアッラーがアラビア語で語った言葉そのままであると信じられ、礼拝など儀礼の場合はかならずアラビア語で読誦される。コーランの聖性は神の直々の言葉であることに由来する。コーランを聖典としてキリスト教の聖書と比較研究することは可能だが、聖典がもつ宗教的意味としてはキリスト教におけるイエス・キリストに対応する。キリストが神のロゴスの受肉であるの対し、コーランは神のロゴスのアラビア語化である。逆に言えば、ムハンマドはイエスのような神の子でも救世主でもなく、ただ神の言葉を預かって人々に伝えるための使徒にすぎない。多くの宗教が創唱者を神格化したのに対し、ムハンマドは神の使徒の域を超えない人間であり、死を免れない存在である。それゆえ、イスラームではムハンマドの権威よりコーランの権威の方が上位にある。ただし、ムハンマドは直接神から啓示を受けた唯一の人間であり、啓示とその精神をもっとも正しく理解した人だった。そのことにより、カリスマ性を付与された人物だったことは疑う余地がない。ここでは詳細な説明を省くが、ムハンマドの言行(スンナ)はシャリーアの重要な源泉であり、スンナを収集したハディース(預言者の言行録)はコーランに次ぐ聖典に位置づけられている。この意味でムハンマドの人格は神格化されなかったが、彼の言葉および言行録が神格化されたと解釈することもできる。

イスラームでは神や預言者の画像は偶像崇拜に相当すると考えるため、イスラーム世界のどこにもアッラーやムハンマドの画像も彫像も存在しない。教義上では、神や仏の画像を偶像として禁止する宗教は多いが、人々が超越的で不可視の神を感覚的に実感するには有効で、必要でさえある。それゆえ、仏教やキリスト教では仏像やイエス・キリストの像や聖母子像が造られてきた。イスラームはユダヤ教と同様に、徹底して画像を禁止してきたが、その代役を果たしているものがコーランの読誦である。コーランが日々の儀式で読誦される度に、ムスリムは啓示の語りかけと神の存在を思い起こすのであり、視覚的な神像に相当する神の聴覚的な形態である。読誦は聖なるものの原初的顕現である出来事としての啓示を繰り返し追体験させるのであり、エリアーデが古代宗教でもっとも重要だと主張した「原初のとき」の反復でもある。

ちなみに、言葉は聖なる形態の典型の一つであるが、その聖性と聖なる力は一様ではない。呪文や言霊は、言葉の意味内容以前というか意味内容を問わない次元で、発話ないし言葉の存在それ自体が力をもち、その力は多くの場合、たとえば鎮魂や病直しのように、人間の意志の及ばない願望を叶えるために用いられる。呪符としての経文や聖典、つまり、聖なる文字や文書がもつ力も同様である。コーランの読誦がもつ聖なるものに特有の力は、特にアラビア語を母国語としないムスリムにとっては呪文に似ているが、礼拝の際の読誦は眼前の神像に代わって、人々の神への精神的集中を助けるものであって、願望成就のためのものではない。

聖典は聖なる教えを記述した文書であり、一般に教義や行為規範の源泉である。それは聖典の言葉の意味内容にかかわり、人間がその意味を理解し、知性や意志で受けとめて、生き方の指針とする。これが聖典のもっとも主要な意義であるが、その教えがもつ聖なるもの特有の力や作用は呪文や呪符のそれとは異なり、信仰者が言葉の意味内容を理解することを介して信仰者に作用する。コーランには何度も「人間に理解できるように神が語り教える」(41:3等)と記されるように、啓示は人間に理解可能であり、信仰者一人一人が理解して教えに従い、意志を決定することにより、その教えは各人の精神と生き方全般に影響を与える。それは聖なるものに特有の畏怖と安らぎを与え、絶対的な忠誠を要求し、時に人を殉教させることもあるが、耐えがたい悲惨や苦悩を和らげ、安らぎを与える。

聖典の言葉は一般に平易で、イメージを喚起する象徴的表現が多く、聖典の物語が人々に親しまれることもある。だが、相反する教義がそれぞれの根拠を聖典に求めるように、多様な解釈が可能なのが聖典の聖典たるゆえんであり、個々の信仰者が聖典を勝手に解釈することはめったにない、むしろ許されない。神学や教義学は聖典の表現に基き神の存在、本質、属性、意志、知識、全能などに関する論理的思想を展開するが、その議論は非常に難解で、それ自体が直接人々の信仰心に訴えることはない。ただし、最後の審判や天国や地獄というイメージを伴う世界観や救済論は行為規範や生活様式の根拠であり、間接的に教義が信仰者の生き方を規定している。教義が人々に影響を与える様態は思想や儀式、修行など明らかに宗教的な領域から、倫理や生活様式など観察するだけでは宗教的領域とは断定しにくい領域に及び、個人の生き方のみならず、社会のあり方から生活様式までを規定するなど実に広範囲にわたっている。イスラームの場合、コーランには婚姻や相続に関する具体的な規範があるように、儀式はむろんのこと、日常生活の場面でも個々人が聖典の言葉に従って生きることが要求されている。理

性や慣習ではなく、啓示に従う生き方は聖なる生き方であるとすれば、シャリーアの規範の及ぶ金銭や性の問題も聖なる生き方に属することになる。

ここで簡単にイスラームが日常生活を重視する根拠を説明しておきたい。コーランがもっとも強調する事柄は終末とその日の神の裁きである。永遠の来世で天国に住まうことが究極の目的であり、現世は来世に比べると短く虚しい。イスラームは他の世界宗教と同じ来世志向の宗教であるが、信仰者に現世否定的な出家や過度の禁欲を要求しない。イスラームでは、宗教的な生き方は出家や修道院にあるのではなく、信仰者の日常生活がその一部なのである。出家や修道院の制度があれば、それが宗教的で、それ以外の社会生活は世俗的と区分されるが、イスラームにはその区分がない。イスラームが日常の社会生活を宗教的な生き方に統合する理由はコーランの人間観にある。コーランでは、神が人間を精神と身体の統合として創造したのであり、身体を卑しいとは見ず、婚姻生活や経済活動などの根底にある欲望を肯定する。出家は、端的に言えば、家庭生活と経済活動の否定であり、人間にとってもっとも自然な存在様態の否定であるが、その根底には身体的欲望の否定がある。イスラームにとって信仰者は決して特別に宗教的な人格、宗教の練達者ではなく、ごく普通の社会生活を営む存在である。しかし、人間は社会においてしか生存できないにもかかわらず、人間の欲望は動物とは異なり本能による抑制が不可能で、盗みや不倫などを犯し、社会秩序を破壊するまでに肥大する。人間は社会においてしか生存できないのに、社会秩序を破壊するという矛盾をはらんだ存在である。そのために社会秩序の維持には法や道徳が必要となる。精神的な信仰と礼拝など儀礼行為と同様に、社会生活も信仰者の生き方の重要な一面であり、イスラームはすべてを宗教の問題として受けとめ、信仰者の生活共同体を重視し、社会規範を定めている。

イスラームの信仰共同体をウンマと言うが、それは信仰の共同体であると同時に信仰者の生活共同体でもある。イスラームにおいても個人の帰依の精神が重要であるが、その精神が具体的な社会生活においてどう表現されるかが問題とされる。ウンマの秩序は個人の信仰心と良心に委ねられる領域もあるが、それだけでは不十分で、一部に法的規範を含むシャリーアに従うことで維持される。コーランの中で婚姻や相続の規範が含まれているがゆえに、預言者ムハンマドはその生涯を通じてウンマの規範の確定に努力したのであり、その努力は初期ムスリムに引き継がれて、シャリーアと呼ばれる法体系が形成された。イスラームでは、宗教が法的規範をも含む社会規範を定めており、この点が日本人やキリスト教徒には理解しにくい。イスラームの社会体制をテオクラシー(祭政一致)と呼ぶことがあるが、ウンマは教会として制度化されたことは一度もない。したがって教会と国家の一方が他方を支配することはない。ウンマの制度化はシャリーアの制度化に求められるべきで、個人によるシャリーアの遵守および国家のシャリーアによる統治がイスラームの政治・社会体制である。それは非合理的な神託による統治でも古代の祭政一致でもなく、むしろ近代国家の法による統治に近い。ただし、後者が人間に制定された法律による統治に対して、イスラームでは法の源泉が啓示にある。

簡単にイスラームと仏教やキリスト教を比較しておこう。後の両者は社会秩序の維持を世俗国家に委ね、教会は信仰者の精神的秩序に責任をもつという政教分離を原則としたが、信仰という精神的原理と社会生活の原理が別であることは決して生きやすいことではない。歴史的に

検証すると、キリスト教や仏教でも宗教と国家ないし世俗社会の関係は時代と地域によって異なり、単純な分離とは言えない。また出家や修道院、聖職者の制度がある宗教でも、大多数の信者は社会生活を営んでいることに気づくとき、在家信者の社会生活がまったく宗教と関係がないのか否かは明らかではない。この問題は今日まで十分に検討されていない。

2 日常生活と聖

イスラームでは、婚姻や相続や商取引なども宗教的規範によって定められ、日常生活が聖なる領域という意味を有する。しかし、イスラームの日常的な社会生活が聖なるものと単純に断定できるかと言え、かならずしもそうではない。シャリーアは神に対する義務行為に関する儀礼規範(イバーダート)と、日常生活に関する社会規範(ムアーマラート)に分類されている。この分類はコーランの中で明示されているのではなく、シャリーアが体系化される過程で成立したが、このことはイスラームにおいても儀礼と日常生活が何らかの意味と程度において区別されていることを意味する。イスラームの基本的な信仰箇条に六信五行があり、五行は信仰告白(シャハーダ)、礼拝(サラート)、断食(サウム)、巡礼(ハッジ)、喜捨(ザカート)という五つの義務行為である。喜捨は義務としての寄付、寄進であり、その額は収入によって定められている点で税に似ている。この寄付金は貧困者や弱者に与えられたり、モスクの管理運営などに用いられる。弱者救済のための喜捨は利他的な社会行為であり、礼拝や巡礼と同様な神への義務であるとは考えにくい、それは「神の道のために財産を使うこと」(47:38等)である。宗教が信者に要求する寄付は欲望の抑制、禁欲の意味をもち、新宗教のみならずどの伝統宗教にも含まれる基本的義務である。

イスラームにおける日常生活と儀礼の区別は、礼拝の前に水か砂による清め(ウドゥー)が必要とされることに顕著に示されている。清め、禊ぎ、浄化は多くの宗教に見られる宗教行為で、一般に儀礼の最初になされるように、日常生活の時間空間からの断絶や隔離を意味する。イスラームの礼拝は毎日五回なされるように、日常生活に組み込まれているが、それは神と直面する時間と空間であり、日常の営みを中断して行なわれる。既述のように、礼拝は路上や自宅などで行なってもよいが、礼拝が行なわれる時、その場所は日常性から断絶した聖なる時間空間となり、礼拝が終わると再び日常生活の場となる。日々の礼拝に顕著に見られるように、イスラームにおいて日常的な営みの多くがシャリーアで定められているという点では日常的な社会生活が聖なる場であるように見えるが、礼拝などの儀礼はその日常から断絶した聖なる時間空間という意味をもつのである。

この点に着目すると、イスラームにおける日常生活は他の諸宗教における区分と同様で、儀礼の聖に対して俗の領域である。だが、イスラームの世俗生活はシャリーアが及ぶ領域である以上、聖の領域だとすると、イスラームに俗の領域は存在しない。何をイスラームにおける俗とみなすかについて少なくとも二つの解釈があり、まずそれを検討してみよう。第一は、シャリーアに従う生き方が聖であるのに対し、そこから逸脱するあり方をイスラームにおける俗とする解釈である。だが、シャリーアからの逸脱は罪であり、従来の聖俗理論においても罪や

災いは俗の領域ではなく、俗なる生活をも乱すこと、つまり聖なる秩序(コスモス)を破壊するカオスである。イスラームでも同様に考えるべきで、シャリーアからの逸脱を聖俗関係における俗とみなす解釈は適切ではない。第二は、イスラームが現実の世界を「イスラーム世界」(Dar al-Islām)と、未だイスラームを受け入れず、イスラームを宣教すべき「戦いの地」(Dar al-harb)に区分することに注目し、前者をイスラームにとって聖なる領域で、後者を俗の領域に相当すると解釈する。この解釈によると、イスラーム世界は日常生活も含めてすべて聖なる領域となるが、それでいいのかという疑問からこの考察を始めている。従来の聖俗理論の俗の領域の解釈にもよるが、「戦いの地」はイスラーム的秩序の存在しない土地であり、カオスに相当するだろう。余談になるが、近代以後の中東では紛争が多く、イスラームは絶えず外部世界を「戦争の地」とみなして敵対してきたかのように思われるが、そうではなく、近代以前のイスラーム世界は比較的他宗教に寛容だったのである。

イスラームの俗に関する上記の二つの解釈は従来の聖俗理論に照らして適切ではない。そうであるなら、イスラームにおける聖俗関係を考察することに意味があるか、あるいはその考察に従来の聖俗理論を基準にする必然性があるのかという疑問が生じるかもしれない。以下に示すように、シャリーアに従う世俗生活の意味を聖俗関係から考察することは、イスラームにとって意味があるだけでなく、看過されていた問題に気づくことになる。

従来の聖俗理論では、聖と俗の分離、両者の異質性が強調されたため、注目されなかったが、古代宗教のコスモスにおける俗の領域は決して非宗教的なあり方ではない。コスモスは儀礼における神々との交流があってこそ維持される秩序であり、労働も家庭生活もコスモスにおいてなされるかぎり、神々に守られている安心感がある。それは近現代の非宗教的なあり方や領域ではなく、神々に守られた秩序に属し、聖なるものの力が及んでいる領域である。日常生活が儀礼とは厳密に区別されてきたのは事実で、今日でもその区別は生きている。この区別によって一方を聖、他方を俗と定義したことは意味のあることだが、現代の非宗教的な世俗概念と、聖俗区分における俗概念を混同しないことが重要である。つまり、俗は儀礼の聖とは区別されるが、聖なるものの力の及んでいる宗教的領域である。このように考えれば、イスラームにおける世俗生活は古代宗教における俗の領域と同じ意味をもつ。この俗概念の解釈は決してイスラームの説明のために従来の理論を歪めたのではなく、他宗教における世俗生活と聖なるものとの関係をより適切に説明する。

ただし、古代宗教のコスモスとイスラームのウンマは同一とは言えない。コスモスは自然界および人間の健康や社会秩序を統合した秩序概念であるのに対して、イスラームのウンマは人間の意志の関与する社会秩序であり、意志の関与できない自然界の秩序は含まれない。前者は人間に責任がある秩序だが、自然の秩序は神の力(予定)に属する。古代宗教においても社会秩序には意志が関与するが、その秩序は意志と努力以上に、神々との交流である儀礼の遂行によって維持される。ウンマの秩序は儀礼による祈願ではなく、個人の信仰と意志的行為によって維持される。イスラームは日常生活を宗教の領域に含めた点で古代宗教と類似するが、根本は来世志向の宗教であり、個人の信仰を重視する点で、他の二つの世界宗教と共通する。

3 聖俗理論と世俗化

聖俗関係における俗概念と近代以後の非宗教性を意味する世俗概念とが混同された原因は、既述したように聖俗の異質性が強調されたためだが、もう一つの原因が考えられる。それは世界宗教による現世否定の教義である。古代宗教は現世肯定的で、新年に五穀豊穡、家内安全、無病息災、子孫繁栄を祈願することは現世的生活の無事を祈ることに他ならない。それに対して、どの世界宗教も個人の来世での救済を強調し、古代宗教の現世肯定を全面的に否定し、厳しく対立した。初期キリスト教は周辺にローマ帝国の異教が存在した状況では、「カエサルものはカエサルに、神のものは神に」に示されるように、現世的営みに消極的にしか関与しなかった。この状況で、日常的な世俗生活は宗教的ではないという意味を潜在的に帯びたと考えることができる。ここに非宗教性を意味する世俗概念と、古代宗教における俗概念、聖なるものの力の及ぶ俗の領域との混同、混乱の起源がある。

だが、現世否定の世界宗教も在家の信仰者たちを加えた教会や教団を組織して存続するうちに、ローマ帝国がキリスト教を公認したように異教社会が消滅するか、日本の神道のように残存しても仏教を承認するようになる。その段階で初期の現世否定的態度が変容し、教会・教団と世俗社会・国家との統合、ヘーゲル流に言うなら和解が成立する。ただし、仏教とキリスト教では世俗生活の統合の形態、教会・教団と国家との関係は異なり、信仰者の社会規範に影響を与えた程度も根拠づけも異なっていた。キリスト教がローマ帝国の遺産を受け継ぎながらもキリスト教的社会を創造したのに対し、仏教は独自の社会規範を与えず、各地の土着宗教と共存してその社会規範に従った。しかし、双方の宗教伝統において、日々の礼拝や定期的な儀礼が信仰者の日常生活に組み込まれ、聖なるものの力の及ぶ俗なる領域が確立されていったことは否定できない。少なくとも、近代の非宗教的な世俗化が広がる以前には、世俗生活は聖なるものの力の及ぶ宗教的領域だったと考える方が適切である。このように考えれば、イスラームのウンマの形態は決して理解しがたいものではない。

近代以後ヨーロッパや日本では政教分離が行なわれ、近代国家に属する世俗生活では宗教とは関係のない理性に基づく合理的支配に従う生活が一般的になった。そこでは世俗的な社会生活が聖なるものの力の及ばない領域となり、やがて非宗教的、反宗教的な思想や生き方が浸透して今日の世俗化した社会に至っている。欧米と比較すると、イスラーム世界には政教分離が進展せず、無神論やニヒリズムなど反宗教的イデオロギーの浸透は少ないように見える。ただし、イスラーム世界でも事情は各国で異なり、西洋型近代を積極的に受容する世俗主義と、それを拒否してシャリーアに基づくイスラーム的近代を目指す復興主義(原理主義)との対立が続いている。欧米や日本から見ると、この対立があること、復興主義の主張が根強いことが不可解なのである。

ごく大雑把に観察すると、生活様式の次元に宗教が浸透する程度が大きいほど、宗教の力が強く、世俗化の進展を妨げており、逆にプロテスタント主義や日本の大乘仏教のように個人の内面の信仰を重視するほど、宗教は衰退し世俗化が浸透したように見える。たとえばデュルケムが見抜いたように、工業化・分業社会の成立には生活様式および生活共同体の変容を伴うが、

イスラーム世界でその発展が少ないのは事実である。この事態を世俗概念と俗概念の区別を用いて整理すると、欧米や日本において非宗教的、反宗教的な思想やイデオロギーが人々の精神にじわじわと浸透した「世俗」社会は、伝統的な「俗」の領域、聖なるものの力の及んだ日常生活を消滅させたのか、「俗」なる日常生活を消滅させないまでも、どのように、どの程度変容させたのかという問いである。この問いは一般には自明のように考えられているが、その詳細は解明されていない。この問題は本論では論じることができず、別の機会を待ちたい。ごく簡単に、今後の課題を述べておくと、イスラーム世界が欧米や日本と比較して、今日もなお宗教性を強く保持しているように見えますとすれば、何がその相違をもたらしているのかという問いを考察することである。この問題もそれほど単純ではない。世俗化が浸透したと言われる欧米や日本においてもなお伝統宗教が存続していることは否定できないし、他方ではイスラーム世界においても外部からは見えにくくても、何らかの程度、世俗化が浸透していないかどうか、どちらの側からも詳細な検討が必要になるはずである。

[Abstract]

The Sacred and Ordinary life in Islam

ODA Yoshiko
Kansai University

1. The Sacred and the Profane in Islam

It has been argued that it is difficult to distinguish the sacred and the profane in Islam and also that it is inappropriate to apply the general theory of the sacred-profane relation to Islam, since Islam has had no distinction between church and state. Islam no doubt has the sacred, Allah, the Qur'ān, and the Shari'ah. It is worth of examining Islamic relations of the sacred and the profane.

Muslims follow a set of rules called the Shari'ah not only in rituals but also in their social life such as marriage and business trades. The Shari'ah, the Islamic law, indeed includes several laws in a strict sense, but also many ritual rules, moral rules, food taboos, and even etiquettes. The Shari'ah developed based on the Islamic view of man. Man is the integral being of spirit and body, and is both individual and social. Faith is no doubt spiritual, and any Muslim should solely face with God. However, at the same time, as a bodily being a Muslim gets married, engaged in business to live, in a word, has to live in a community. The Ummah is the Islamic spiritual community as well as the Islamic society where Muslims live their daily life. It has never been institutionalized. The Ummah has ever existed where the Shari'ah has had control over individual Muslims in both Islamic and non-Islamic nations.

If everywhere the Shari'ah governs is the sacred space based on the general sacred-profane theory, Islam has no profane space, for the Shari'ah is in control of Muslims' ordinary life. However, the prayer, five times a day, starts with the purification rite so as to interrupt their ordinary activities. Fasting and pilgrimage similarly are taken place in the sacred time and space in Islam. In this sense, Islam has the same distinction between the sacred and the profane as other religions.

2. The Sacred-profane theory and the Secularization

The secularization in developed nations today means non-religious and anti-religious society, but the profane space was not so in traditional religions. In primitive religions, strictly separating the profane from the sacred, the profane ordinary life can be maintained and protected by the sacred divine power the contact with which rituals enable. For this reason, rituals are the most important religious obligation in them. Thus, the anti-religious secularization today should be distinguished from the profane society in primitive religions.

There seems to be reasons why the secular and the profane become confused. First, since Rudolf Otto emphasized, scholars have investigated such the sacred objects clearly separated from the profane as religious experiences, rituals, temples and divine images, but not deeply examined the religious significance of the profane society. Secondly, as world religions in general, particularly early Buddhism and Christianity, denied this-worldly values, the social life was regarded as the insignificant to religious life. However negative to this-worldly way of life the

world religions were, they gradually reconciled themselves to this world, for most believers were necessarily engaged in this worldly life. Islam, also an other-worldly world religion, exceptionally has been responsible to this world from the beginning. In a sense, the two other world religions, like Islam, became responsible to the socio-political life in the course of history.

Nevertheless, as mentioned above, the history of religions has not clarified the religious meaning of ordinary life. We must ask whether or not many secular societies today are completely non-religious. In order to examine the religious significance of man's way of life and the modern secularization, we need to reconsider relationships between the sacred and the ordinary life. Further Islamic case studies will contribute much to this consideration.